

# Otaru Literary Museum

## 小樽文学館



### はじめに

小樽は、明治時代(1868—1912)の中期以降、北海道における経済の中心地であり、日本最大級の港街の一つでした。

数多くの人々が、ある者は北海道の奥地の開拓を夢み、またある者は新しい職を求めて、日本各地から小樽港に上陸しました。そしてまた、そのなかの多くの者が、未開地へ向かう代わりに、小樽に住み着くことを選びました。

故郷からさまざまな独自の文化をになってきた彼らは、小樽における新しい共同体の中で、自然に、異文化交流を行うこととなりました。

彼等の希望と知性、そして情熱は、文化的・経済的な豊かさを生み出し、そしてその豊穣な文化の土壤から、多数の小説家、詩人、文学者が輩出したのです。

小樽文学館は、小樽における文学および文化の発展の有様を調査し、文学資料を収集し、小樽の文学の歴史についての知見を皆様にご紹介するため、昭和53(1978)年に創立されました。

どうかご来館の皆様には、当館の常設展ならびに折々に催される多彩な企画展において展示される数々の文学資料をお楽しみいただき、小樽の先人たちの精神的活力に触れていただけましたら幸いに存じます。

## 代表的な文学者



秘められし啄木遺稿  
(小樽啄木会編 昭和22年・1947)



小樽公園の啄木碑 昭和26年(1951)建立

「こころよく我にはたらく仕事あれ  
それを仕遂げて死なむとぞ思ふ。」

### 石川 啄木

(明治19年・1886-明治45年・1912)

歌人・作家

石川啄木は、北海道の開拓時代に小樽を訪れた文学者の中で、最も著名な人物です。出身は、岩手県岩手郡日戸村(現・盛岡市日戸)。わずか満16歳という若さで、有名な文芸雑誌『明星』に投稿した新体詩や短歌が掲載され、新進気鋭の詩人と目されました。しかし、寺の住職であった彼の父が、突然その寺を追われることになったことから、啄木は、渋民村の小学校教師として働くことになりました。彼はそこで一年ほど勤めましたが、文学への夢は断ちがたく、おのれの就くべき天職と、心の内を明かし合える同好の士を探し求めて、北海道に渡りました。そして約一年のあいだ、函館・札幌・小樽・釧路の街を転々としたのです。

啄木が小樽に滞在したのは、明治40年(1907)の9月末から明治41年の1月まで。この地で彼は『小樽日報』の新聞記者となり、新聞紙面に短歌欄を作つて投稿を募り、その一方で、批評精神に満ちた論説を次々と執筆しました。しかし、彼の『小樽日報』における勤務は、わずか3ヶ月で終わりを迎えました。仕事の内容にせよ、職場にせよ、一つところにおとなし

く留まりきれない彼の野心は、同僚たちとの確執をひきおこし、やがて、それがもとで突然に社を辞職せざるを得なくなったのです。直接の原因は、彼が、札幌に新設されると噂があった新聞社への転職を内々に試み、12月11日から12日にかけ無断欠勤して札幌に出かけたため、その態度に激怒した事務長に殴られてしまったからでした。

さてその後、真冬から春先まで釧路で過ごしたのち、彼は東京へ赴き、『朝日新聞』の校正係となって働くかたわら、新しいスタイルの短歌を創作し始めました。その中には小樽での出来事が回想的に詠まれた短歌が含まれており、彼の最初の歌集『一握の砂』の一節「忘れがたき人人」中に22首が収録されています。しかし彼は、貧困生活が原因で結核の病にかかり、26歳でこの世を去りました。二番目の歌集『悲しき玩具』は、死の2ヶ月後に出版されたものです。

現在小樽には、啄木の滞在を記念して、小樽公園・水天宮・小樽駅前の3箇所に歌碑が建立されています。



岡田三郎(左から5人目) 昭和5年(1930)映画  
「昨日の薔薇」のセット内にて



巴里 叛逆者の告白(大正13年・1924)

## 岡田 三郎

(明治23年・1890-昭和29年・1954)

小説家

岡田三郎は、明治23年に、江戸時代に松前藩の城下町であった松前で生まれました。岡田家は富裕な綱元の家柄でしたが、三郎の父親の代に家産が傾いたため、彼は中学校に進学する際に、当時小樽市長を務めていた伯父・山田吉兵衛の家に世話になることになり、一人、小樽にやってきました。

三郎は、府立小樽中学校(現・小樽潮陵高等学校)の入試にトップの成績で合格。在学期間も常に最優秀の成績を修めた優等生でした。ところが彼は次第に洋画家に憧れるようになり、卒業直後、上京する友達を駅まで送ると嘘をついて伯父の家から出奔。東京在住の叔父の家に一時身を寄せ、さらにそこも飛び出して、太平洋画会研究所で数ヶ月絵画を学びました。

しかし、生活費が底をついて叔父の家に戻った時、三郎は叔父にその無軌道ぶりを非難され大げんかとなり、再びそこを出ると、文字通り絵筆をへし折って画学を断念。翌年に徴兵適期のため小樽に戻るまで、ゴム櫛工場の職人として独力で暮らしました。

やがて小樽税務署の官吏となった三郎は、その後早稲田大学において学生生活を送り、さらに、自然

主義の小説家として輝やかしいデビューを果たしました。しかしその3年後、作家としてのスランプに苦しみ、大正10年(1921)から12年まで単身パリに渡航。フランスの表現主義、モダニズム、そしてコント(ウイットと批評性に富んだ掌編小説)に影響を受けました。彼は帰国して日本にコントを紹介し、また、コントを含むさまざまなスタイルの小説を執筆。その一方、複数の文芸雑誌の編集者としても活躍しました。彼はまた、モダニズムの作家たちと共に、プロレタリア文学に対抗する〈十三人俱楽部〉というグループを結成しました。また一度は、映画業界に対抗して文学者たちが集まり創設した映画会社〈日本キネマ〉の映画監督として、メガホンを取ったこともありました。

太平洋戦争中に日本文学報国会機関誌『文学報国』の編集長を務めた三郎は、戦後は戦争に抵抗しなかった文学者とみなされ、否定的な評価を受けたこともあります。しかし、彼の絶えざる創作活動は、昭和29年(1954)に肺結核で世を去るまで続きました。

代表作 『巴里 叛逆者の告白』『物質の弾道』『秋・冬』『伸六行状記』等



早川三代治戯曲「聖女の肉體」の舞  
台原案図(早川画・水彩)



〈土と人〉シリーズ 左より第1部『根』・第2部『処女地』・第3部『  
土から生れるもの』・第4部『生ける地』

## 早川 三代治

(明治28年・1895-昭和37年・1962)

小説家・劇作家・経済学者

早川三代治は、小樽の入舟町(現・入船)で生まれました。祖父の早川両三は、明治4年に小樽がようやく〈村並〉となったばかりの時代から、この地で事業を興した草分け的大商人の一人でした。

三代治は、府立小樽中学校(現・小樽潮陵高等学校)在学中の15歳頃、アメリカの民主的詩人であるウォルト・ホイットマン(1819—1892)に憧憬の念を抱き、やがて、当時注目を浴び始めていた小説家で、日本にホイットマンを情熱的に紹介していた有島武郎(明治11年・1878—大正12年・1923)のことも敬慕するようになります。三代治は経済学を学ぶために北海道帝国大学(現・北海道大学)に進学しましたが、そこで思いがけず、北大の英語担当教授であった有島武郎と遭遇。短い期間ながら、心のこもった指導を受けました。その経験は三代治が文学に傾倒する大きな契機となり、師弟の交流は有島の死まで続きました。

大学卒業後、三代治は渡欧して、ボン大学とベルリン大学で経済学をさらに研究し、その間ドイツ表現主義の文学や演劇に影響を受けました。また、彼は、留学の帰途にウィーンに立ち寄り、経済学者のヨーゼフ・シュンペーター(1883—1950)に面会を申し入れて、理論経済学の重要性についての教示を受けました。

帰国後、彼は、母校の北海道帝国大学で経済学を講じましたが、同じ時期に、著名な小説家である島崎藤村(明治11年・1872—昭和18年・1943)からその文学的才能を認められ、藤村によって文壇に紹介されました。そして三代治は、北海道の全市町村にわたって所得分布の実証的研究を継続的に進めるかたわら、数多くの小説・短編・戯曲を執筆。彼の代表的な戯曲の1つである『新しき縄』は、東京の帝国ホテル劇場において上演もされました(昭和8年・1933)。

第二次大戦後、三代治は小樽商科大学の経済学教授となり、また晩年の数年間は、東京に在住して、早稲田大学で教鞭をとりました。彼は、道東の入植者たちの開拓の歴史を描く大長編小説『土と人』(六部作構想、執筆は第五部まで)を書き続けていましたが、昭和37年、帰郷中の小樽において脳梗塞で突然世を去り、作品の完成はかないませんでした。



多喜二が小樽高商時代に描いた静物画  
(水彩)



『蟹工船』のポスター

## 小林 多喜二

(明治36年・1903-昭和8年・1933)

プロレタリア作家

小林多喜二は秋田県の川添村(現・大館市)で生まれました。小林家は、祖父・多吉郎の代までは農業のほか旅宿も経営する豊かな家系でしたが、その長男の慶義の代に事業に失敗し、小作に転落してしまいました。弟の末松(多喜二の父)は傾いた家の始末を兄から任せられ、苦しい生活を余儀なくされましたが、一方慶義は小樽に渡り、製パン業者として成功。末松一家を小樽に呼び寄せ、その後、次男で賢く将来性のある多喜二を自分の家から序立小樽商業学校(現・小樽未来創造高等学校)に通わせる提案をしました。そこで、多喜二は伯父の家業を手伝いながら勉学に励むことになったのです。

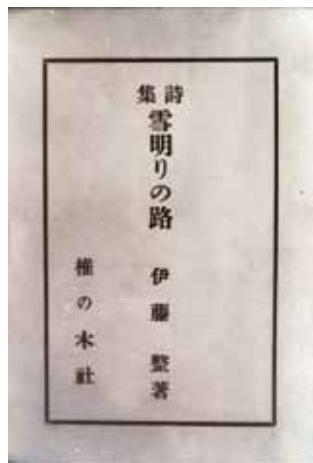
彼は伯父のため、そして家族の暮らしを助けるために、学校に行く前と放課後にパンを取り扱う顧客に配達し、パン工場でも働きました。当時、多喜二是洋画家に憧っていましたが、手堅い職業に就くことを求めていた伯父に反対されました。このような、束縛を強く感じるを得ない境遇にあったため、多喜二是次第に、社会そのものの不公平について考えるようになりました。

画家への道をあきらめたのち、多喜二是小樽高等商業学校(現・小樽商科大学)で学びながら短歌や小説を創作し、小樽の多くの文学青年の中でも、際だった才

能が注目されるようになりました。高商卒業後は北海道拓殖銀行小樽支店に勤務し、まもなく、商業学校以来の友人たちと『クラルテ』という名の文芸同人誌を発行しました。またこの拓銀時代は、彼の主要な作品『防雪林』『一九二八年三月十五日』『蟹工船』などが集中的に書かれた時期もあります。しかし、そのような文学的・イデオロギー的な活動が原因で、多喜二是昭和4年(1929)、銀行員の職を失いました。

その後多喜二是上京して共産党のシンパとなり、昭和6年には党員となりました。警察の監視を受け、何回か投獄もされましたが、新進のプロレタリア作家として積極的に活躍し続けました。しかし昭和7年、左翼思想への弾圧が激しさを増したため、多喜二と彼の同志たちは地下に潜伏。その時期、彼は変名で『党生活者』を書きましたが、これが実質的に彼の最後の作品となりました。

昭和8年2月20日、彼は逮捕されて築地警察署に送られ、そこで拷問を受け落命。彼の死にまつわる真実は戦後まで伏せられましたが、数篇の作品は死の直後に英語に翻訳され、海外で読者を得ました。現在、小樽の旭展望台には彼を顕彰する文学碑が建立されています。



雪明りの路(大正15年・1926)



得能五郎の生活と意見  
(昭和16年・1941)

## 伊藤 整

(明治38年・1905-昭和44年・1969)

詩人・小説家・翻訳者・批評家・文学史研究家

伊藤整は、道南・松前の東隣にあたる炭焼沢村で生まれましたが、その1年後、家族とともに、小樽の隣村であった塩谷村に移り住みました。整は塩谷で成長し、府立小樽中学校(現・小樽潮陵高等学校)に通学しました。中学を出た後は、小樽高等商業学校(現・小樽商科大学)に進学。

彼は卓越した英語能力を持ち、また、抒情詩を熱烈に愛好していました。彼には、数少なくはありましたか、同じ通学列車に乗り合わせて、同じ学校や小樽の職場に通う、心の友とも言うべき親友がいました。彼らから詩や文学に関する興味深い話を聞くにつれ、整は次第に、詩人になりたいという想いを強くしていました。

大正15年(1926)、整は『雪明りの路』という抒情詩集を刊行。彼の詩は同時代の詩人たちからきわめて高い評価を受け、彼はいよいよ、東京に出て詩作を始めようと決意しました。ところが、ちょうどその時期の日本では抒情詩の流行が次第に終わりを告げ、前衛詩が人気を得はじめていました。

そこで整は詩人になるのを諦め、代わりにハーバート・リード(1893—1968)、ジェイムズ・ジョイス(1882—1941)、D.H.ロレンス(1885—1930)らの英文学理論を翻訳するようになりました。また彼は、ジョイスの小説『ユリシーズ』の翻訳を世に出しましたが、その作品の革新的な文体に刺激されて、彼は自分自身の小説を書きたいと思うようになりました。

伊藤整はその生涯を通じて、数多の小説や隨筆、文芸批評等を執筆しました。『幽鬼の街』『得能五郎の生活と意見』『若い詩人の肖像』などは、そのわずかな例に過ぎません。そして晩年には、近代日本文学の歴史についての長大な研究書『日本文壇史』を執筆し、東京・駒場に創立された日本近代文学館の創設者の人となりました。

彼の記念碑は、小樽の塩谷海岸にほど近い、〈ゴロダの丘〉と呼ばれる小高い丘の上にあります。その碑面には、彼の、哀調の籠もった抒情詩「海の捨児」が刻まれています。

## その他の文学者



並木凡平



左川ちか



大野百合子



小熊秀雄



河邨文一郎

小樽における人々の創作活動は、コミュニケーションツールとしての〈和歌〉や〈俳句〉の会に端を発すると言つてよいでしょう。同郷の知己の少ない土地で、娯楽もない長い冬の間、神職や僧侶、また大商人など知識層の人々は、歌会・句会を各家の持ち回りで開催し、飲食もともにして打ち解け合いました。やがて歌作・句作の習慣は、次世代の、とりわけ近代教育を受けた若年層の間に広まってゆきました。明治・大正期の小樽で短詩方面に優れた人が多いのはそのためです。

並木凡平(明治24年・1891-昭和16年・1941)と彼の仲間たちは口語短歌運動を展開し、当時の小樽は〈口語短歌王国〉として有名になりました。田中五呂八(明治28年・1895-昭和12年・1937)は、日本における近代川柳の代表者の一人です。小田觀蟹(明治19年・1886-昭和48年・1973)と戸塚新太郎(明治32年・1899-昭和40年・1965)は、小樽のみならず、北海道の短歌界をリードし、広く日本に北の大地の短歌を印象づけました。小樽高商では〈緑丘吟社〉という俳句結社が形成され、高濱年尾(明治33年・1900-昭和54年・1979)や比良暮雪(明治31年・1898-昭和44年・1969)といった優れた俳人らが輩出しました。

また、それら短詩形を愛好する厚い層を土壤として、大正期以降、近代詩人も次々と頭角を現しました。大野百合子(明治41年・1908-昭和13年・1938)は優美な作風の抒情詩人、左川ちか(明治44年・1911-昭和11年・1936)は理知的なモダニズム詩人。この二人の女性詩人は、惜しくも、若くして世を去りました。小熊秀雄(明治34年・1901-昭和15年・1940)はプロレタリア詩のほか、批評・童話・絵画のジャンルにおいても活躍しました。吉田一穂(明治31年・1898-昭和48年・1973)は瞑想的で美しい詩的イメージを展開した象徴詩人として知られています。河邨文一郎(大正6年・1917-平成16年・2004)は現代詩のパイオニアであり、昭和47年(1972)の札幌オリンピックの際はテーマソング「虹と雪のバラード」を作詞。その歌は人気を博し、世代を超えて今も歌い継がれています。さらに、少年期を小樽で過ごした石原慎太郎(昭和7年・1932-)は、昭和31年(1956)当時、最年少記録で芥川賞を受賞、その作品がセンセーションを巻き起こした小説家です。また、やはり少年期を小樽で過ごした山中恒(昭和6年・1931-)は娯楽に徹した〈自動読み物作家〉を自認し、戦後教育の丹念・膨大な記録でも知られています。



文学館入口



〈伊藤整の通学列車〉の  
再現コーナー



〈伊藤整の書斎〉の再現コーナー



JJ's Cafe  
文学館内のセルフサービスカフェ

## インフォメーション

### 料 金

■ 市立小樽文学館	大人 300円 (240円) 高校生および市内高齢者 150円 (120円)
□ 市立小樽美術館 (同館内に併設)	大人 300円 高校生および市内高齢者 150円 (120円) *カッコ内は20名以上の団体料金です。

\*両館共通のチケットもございます。なお、美術館および共通チケットの料金は展覧会の内容により異なることがございますので、ご必要の場合は事前にお問合せください。

### 開館時間

火曜日—日曜日 9:30 am - 5:00 pm

最終入館時間 4:30 pm

(閉館時間30分前までの入館をお願いいたします)

### 休館日

月曜日、月曜日が祝日の場合は翌火曜日

年末年始 (12月29日—1月3日)

\*特別なイベント等により休館日が変更になる場合がございますのでご注意下さい。

### ア クセス

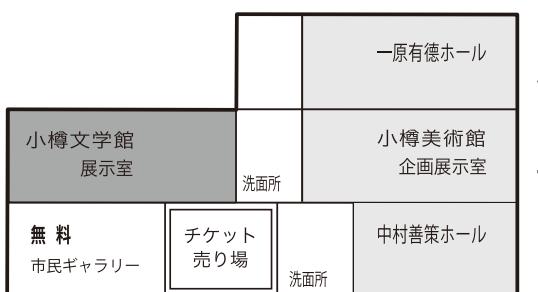
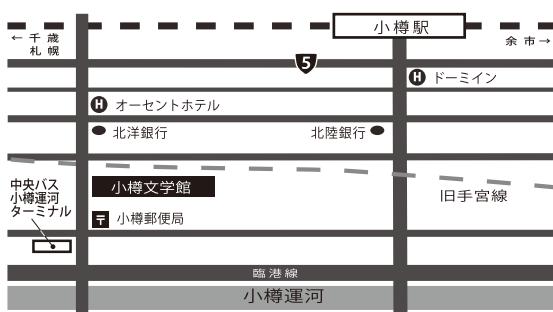
住所 〒047-0031 小樽市色内1-9-5

JR小樽駅より 徒歩約 10 - 15 分

中央バス小樽運河ターミナルより 徒歩約5分

駐車場 文学館横(松田ビル側)に約20台駐車可

\*身障者のご車両につきましては専用駐車スペースがございますので、当館スタッフにお声かけください。



3F

2F

1F